コククジラは大隅海峡を通るのか？

宇仁義和

コククジラ（図１）は海岸に近い場所を好むヒゲクジラで，北太平洋の東西に分布し，亜熱帯から極北域にまたがる長大な回遊で知られています．アメリカ大陸沿岸に分布する東部系群は，近年，捕鯨開始以前の２万頭以上にまで状態にまで回復しましたが，日本沿岸を回遊する西部系群は回復が進まず，現在の推定個体数が 120 頭と絶滅寸前の状況です．西部系群は樺太（サハリン）北端近くのオホーツク海を夏の餌場とすることが知られていますが，出産海域はいまだにわかっておらず，回遊経路にも不明な点が残されています．

図２は平凡社 1996『日本動物大百科２哺乳類 II』pp34-35「コククジラ」で示されているものです．この図では，回遊経路は関門海峡から瀬戸内海をとおって本州太平洋沿岸に伸びており，九州南部や本州や北海道の日本海沿岸は通過していません．しかし，1996 年に北海道でメス成獣の上半身が漂着し，翌 97 年には新潟県で頭骨，そして 1955 年と 1970 年の２回にわたり能登半島東岸の富山湾で定置網に混獲したときの写真が発見され，日本海沿岸も回遊経路として使われていることが明らかになっています．

太平洋沿岸では，2005 年に３件４頭，2007 年に１件の定置網での混獲があり，同年には北海道で死体の漂着が１件ありました．すべてメスの個体で，３年間で５頭のメスが失われたことはたいへんな衝撃でした．しかし，関門海峡や瀬戸内海からは，目撃や混獲，船体衝突の情報はありません．これはコククジラは大隅海峡を通っていることを暗に示しているのではないでしょうか．

いまのところ，九州をぐるっとまわる回遊経路を証明する資料はありませんが，2003 年には宮崎市近郊の砂浜で全身骨格が発見されています．大隅海峡を目視観察する，あるいは，骨格など漂着物を探すことで，九州周回ルートを証明することが出来るかも知れません．

・沖を観察しませんか？

一日中海を見続けるのは困難なので，観光やドライブのついで，自然観察や漂着物探しの時に沖にも眼を向けていただければ幸いです．薩摩半島では，長崎鼻や野間半島，廃止された風車村などが観察適地です．大隅半島では佐多岬，内之浦宇宙観測所付近の高台，都井岬などが観察適地です（図３）．

・白色のヒゲ板，大きな骨はありませんか？

コククジラ由来の漂着物としては，骨格やヒゲ板が考えられます．ヒゲ板は白色，頭骨や下顎骨は成獣であれば２m以上ありますが，子どもであれば１m足らず．鹿児島県内で巨大な鯨の骨がありましたら，ぜひ連絡ください．郷土資料館やかつての捕鯨基地，漂着物収集家のコレクションなどにあるかも知れません．連絡先：unisan@m5.dion.ne.jp

（うに・よしかず　東京農業大学オホーツクキャンパス）

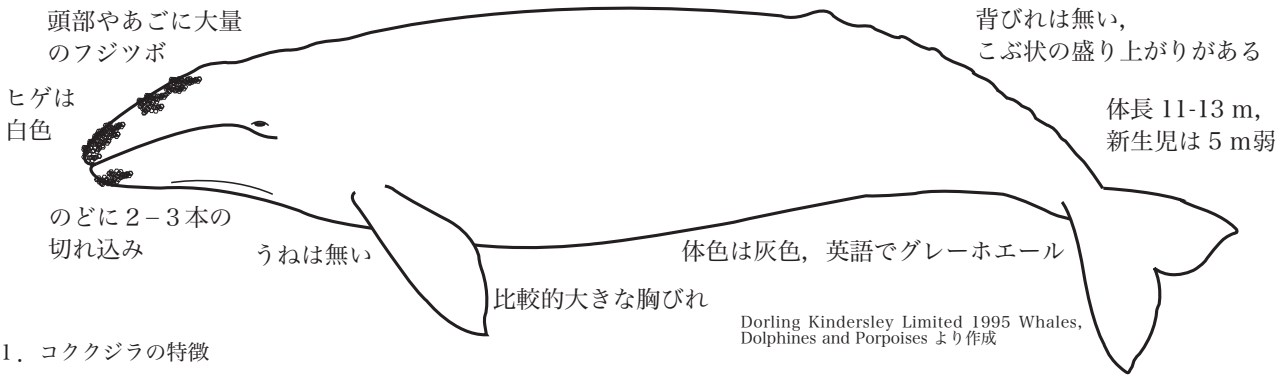

図１．コククジラの特徴

図２．1996 年のコククジラ回遊路推定図（上）

図３．大隅海峡周辺の観察適地（右）